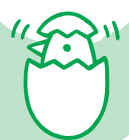




高め合える友だち

高め合える友だちとは、どんな友だちだろう。



152-1

めざせ、百八十回！

「めざせ、全チーム一分間で百八十回。」

みんなで決めた、クラスの目標だ。六年生になってから、「毎朝五分間練習し、その後五分間でとべた回数を計る」という、「長なわハの字とびチャレンジ」に取り組んできた。

すでに、目標を達成したチームもある中で、わたしのチームの最高記録は、百五十三回だ。卒業まで、あと一か月しかない。チーム

リーダーのわたしは、少しあせっていた。

「みんな、お待たせ。おくれてごめんごめん。」

しゅんいち

俊一が登場し、チーム全員がそろった。明るく声をかけてきた

俊一を、みんなはえがおでおかえている。俊一は、時間にいいかげんなところがあるが、いつも明るくて、場を盛り上げるのが得意な人気者だ。わたしは反対に、「愛菜は、時間やきまりを守るタイプだね。」と言われることが多い。でも、言ったほうがいいと思うことはすぐ口に出すので、「きつい」と言われることもある。

「いいよいいよ。他にも、ちこくしてきた人はいるから。」

しゅんいち

と、みんなは俊一に向かって言っていたけれど、

152-2

153-1



わたしは、時間がないので、あせって言った。

「じゃあ、時間がないから、もう記録をとるよ。用意……スタート！」

長なわの練習が始まり、朝の校庭に、「ハイ、ハイ、ハイ……。」と、みんなのかけ声がひびく。

「九十一、九十二……いい調子！」

期待が高まったそのとき、タイミングがずれた俊一の足に、長なわがからまった。

「まだ時間があるから、落ち着いて！」

わたしは声をかけたが、みんなはあわててしまい、大失速。記録は百四十一回だった。ここ十日間ほど、百五十回をこえない日が続

いていたせいか、残念がる人もいない。

「しかたない。また明日がんばろう。」

副リーダーの健太けんたの声かけに、みんなは教室にもどろうとした。

けれど、わたしは俊一に向かって少し強い口調くちようで言った。

「最近、俊一のところでは引っかかることが多いよね？ 早く来て、

しっかり練習してよ。」

俊一は、少しむっとしたようだけど、わたしの言っていることは、絶対にまちがっていない。俊一はだまっただまだ。

わたしは、さらに強い口調で、今度はみんなに向かって言った。

153-3

153-2

「みんなももっと真剣しんけんになってよ。あと一か月しかないんだよ。こんないかげんなチームじゃ、百八十回なんて、絶対に無理だよ。」

わたしの言葉に、みんな下を向いてだまってしまった。(少し言いすぎたかな……。)とっていると、俊一しゅんいちがぱっとえがおになって言った。

「愛菜あいなの言うとおりに思う。みんな、めいわくかけてごめん。明日からちゃんと来るよ。このメンバーでとべるのもあと少しなんだから、最後までがんばろう。」
みんなは、だまっただまだったが、俊一の明るい言葉を聞いて、ほっとしたようだった。

次の日。久しぶりに最初から全員がそろった。

「おはよう。今日から、ちゃんとがんばるよ。」

俊一は、えがおでわたしに言った。そのえがおは、なんだかまぶしかった。

「よし、みんな練習がんばろう！」

わたしが言うと、みんな元気に、「おお！」と応えてくれた。その日も百八十回はとべなかつたけれど、目標に向かって、みんなの心が一つになった気がした。

その後の練習でも、わたしは、大切だと思うことは必ず言っ

154-2

154-1

153-4

た。ただ、前とちがって俊一のように「周りを明るくすること」と「えがおで言うこと」を心がけてみた。俊一はあいかわらず場を盛り上げてくれたし、その後の練習にはちこくするところがなくなった。

「おいしい。ちよっとタイミングがずれたけど、だいじょうぶ！いけるいける！」

そんなわたしの言葉を聞いた俊一が、こっそり言いに来た。

「あいな愛菜、なんだか変わったね。」

「しゅんいち俊一もね。」

わたしたちは、顔を見合わせてにっこりした。

みんなの気持ちは、今まで以上に一つにまとまってきたように感じる。

いよいよ明日は卒業式。記録も少しずつ伸びてきて、昨日までの最高記録は百七十六回だ。今から小学校生活最後のチャレンジが始まる。

（俊一があのととき、わたしに言い返さなかったのはきつと……。）

そんなことを考えていたとき、俊一が、「いよいよ最後だ。がんばろう！」

と言った。その言葉に続けて、わたしはとびきりのえがおで言った。



155-2

154-3

155-1



周りの高め合っている友だちをさがしてみよう。



高め合える友だちとは、どんな友だちかな。考えたことをまとめよう。



二人が変わることで、どんなよさが生まれただろう。



俊しゅんいち一いちにとって、愛菜あいなはどんな友だちだろう。

「さあ。めざせ、百八十回！」